

# 古代語複合動詞の後項「おく」について

徳 本 文

後項動詞「おく」は上代から使われており、『源氏物語』にはのべ285語が使われている。古代語の複合動詞「ゝおく」は現代語の「ゝておく」に置き換えて解釈されることが多いが、現代語「ゝておく」の中心とも言える「動作主体の意図」が必ずしも表されておらず、「ゝておく」と同じ意味とは言えない。たとえば、『源氏』でしばしば使われている「思ひおく」を現代語の「(そのように) 思っておく」に置き換えると、何らかの利益や目的のためにあえて事実と違うように考えるという意味になり、違和感が生じる。このような単純な現代語への置き換えに加えて、「ゝおく」に複数の用法があることから、文中での意味を把握しにくいこともあるため、本稿では、古代語の後項動詞「おく」を用法ごとに整理し、意図性を中心にその意味を探る。筆者は古代語の「動詞連用形+動詞」を十一に分類し、本動詞としての意味を失った後項動詞を「補助動詞の後項」としており、本考察はその分類に基づいて行なった。なお、本稿で言う「意図性」とは「何らかの目的、利益、効果のために意識的に動作を行う」ことを指す。

作を行う」ことを指す。

## 一 現代語「ゝておく」の意味

一般的に「ゝておく」には準備、放置、一時的処置の意味があり、意志動詞のみにつくとされているが、ここでもまず先行研究の論旨をまとめて、現代語の「ゝておく」の意味を考えてみる。

高橋(一九七六)<sup>(2)</sup>は「ゝておく」は「すがた(アスペクト)」を表す用法と「もくろみ」を表す用法があるとしている。

・すがた(アスペクト)を表す用法

(1) 対象を変化させて、その結果の状態を持続させることをあらわす

(2) 対象にはたらきかけないで、そのままの状態を持続させることをあらわす

・もくろみを表す用法

(1) つぎにおこることがらのために準備的な動作としておこなう動作をあらわす

(2) 体験する動きをあらわす

(3) ことさらする動作、しかたなくする動作(無意志動詞につく)

(4) 「したにもかかわらず」の意味

例 じぶんでころんでおいて、ひとにあたる。

吉川(一九七六)<sup>(3)</sup>は、「本来ムード的なものなのか、アスペクト的なものなのか」と問題提起し、まず次の4種をアスペクト的要素としてあげた。

(1) 対象の位置を変化させ、その結果の状態を持続させる

(2) 対象を変化させ、その結果の状態を持続させる。

(3) ある時までに対象に変化を与える。

(4) 放任(対象に働きかけないことを持続させる)

さらに、これらのアスペクト的要素にムード的要素が加わって「準備」「二時的処置」といった意味を表すようになったとしている。

菊地(二〇〇九)<sup>(4)</sup>は「ておく」の中心の意味は「後の時点における効力の発現を見越して意図的にその行為をおこなうこと」であり、派生的に「会話を切り上げる」という機能も持つと指摘し、「持続」等のアスペクト的な側面は本質的な問題ではないとしている。確かに「準備」「放置・放任」等の「ておく」のどの用法も菊地の述べる「後の時点における効力の発現を見越し」た行為と言えるが、アスペクトと意図は相反するものでも用法として分けられるも

でもない。現代語の「ておく」は「何らかの状態の持続」というアスペクトを表すとともに、その状態を作り出す動作も状態の持続も主体の意図によるものであることを明確にするものであり、「ておく」には「持続」と「主体の意図」<sup>(5)</sup>どちらも不可欠の要素といえるだろう。

## 二 古代語の動詞「おく」の意味と分類

### 二・一 辞書記述

まず、動詞「おく」の単独の意味を確認する。辞書記述から中世以降の用法を除いてまとめると次のようになる。

おく(置く・措く)

□ 自動詞 露や霜・雪などが降ってたまる。

□ 他動詞 ①物や人などを一定の場所や地位にすえる。(そして、とどめる。)

物がある位置にすえる。(配置、設置) 制度や施設を設置する。

人がある場所に住まわせる。雇う。地位につける。

② 除外する。

③ 物や人を後に残して去る。

④ 隔てをおく。間をあける。

時間・空間を隔てる。

心を隔てる＝疑いや遠慮等を感じる。

⑤ 放置する。

補助動詞的な用法の記述としては、日国には「ある状態をそのまま続ける。前もってしておく場合にも、したままほうっておく場合にも言う」とあり、『古語大辞典』（小学館）には「…ておく」とあるのみで、詳細な意味や現代語との違いは記述されていない。『古語大辞典』（角川）には「①行動の結果をそのまま残す。～ておくしたまま放置する意を伴っていることが多い。②前もってする意を表す。」との記述があり、②の用例は『徒然草』である。

## 二・二 古代語における「～おく」の意味分類

表 1

	～おく	本動詞の意味	補助動詞的
万葉集	24(14)	23(13)	1(1)
記紀歌謡	2(1)	2(1)	0(0)
竹取	5(4)	5(4)	0(0)
土左	1(1)	0(0)	1(1)
伊勢	3(2)	3(2)	0(0)
古今	8(6)	7(5)	1(1)
後撰	17(13)	16(12)	1(1)
拾遺	10(8)	8(6)	2(2)
源氏	292(76)	198(53)	94(23)

( )内 異なり語数

上代・中古の資料から筆者が抽出した「おく」を後項とする複合動詞の分類は表1の通りである。このうち、前項がすでに名詞化しているものは複合動詞と見なさない。ちなみに前項名詞化に入るものには「恨みおく」「畏まりおく」「絶えおく」「隔ておく」があり、どれも心理的・空間的・時間的に距離を隔てる意味である。

### 三 本動詞の意味を保持している後項動詞「おく」

まず本動詞の意味を保持している「おく」について見てみる。この中には「うちおく」「さしおく」のように前項が接頭辞化しているものも含まれるが、本節においては考察の対象外とし、前項と後項とともに本動詞の意味を保持して修飾関係にあるものについての考察する。また「降りおく」のように、「露や霜がおりてとどまる」という自動詞的な意味のものも対象外とする。ただし、しばしば「露や霜がおく」が「くおく」の掛詞や縁語として使われること、「熾き」との掛詞があることを見ても、「かすかながらも消えずにそこにとどまっている」という状態性が「おく」の根底に常にあると思われ、意味は無視できるものではない。

「置く」設置・配置・処遇の意味

1 安吉佐礼婆 奇里多知和多流 安麻能河波 伊之奈弥於可婆  
都藝弓見牟可母（万葉卷二〇・四三二〇）

あきされば きりたちわたる あまのがは いしなみおかは  
つぎてみむかも

2 海若者 霊寸物香 淡路嶋 中尔立置而（万葉卷三・三八八）  
わたつみは くすしきものか あはぢしま なかにたておきて  
3 女の中には、太政大臣の山里に籠めおきたまへる人こそ、いと

上手と聞きはべれ。（源氏・少女）

4 世に靡かぬかぎりの人々、殿の事とり行ふべき上下定めおかせ  
たまふ。（源氏・須磨）

1と2は物をその場所に置くという意味、3と4は人の処遇である。2は「予めくておく」という意味の辞書記述の用例に引かれているが、「海神が淡路島を中に置いて（配置）」という意味で、補助動詞的用法とは言えない。3は源氏が明石の君を山里に住まわせているという意味、4は源氏が邸内のことを任せる使用人の役割を決めるという意味で、どちらも「人をその場所・地位に置く」という本動詞の意味を保持している。

「後に残す」という意味

・言葉・物を残す

5 文を書きおきてまからん。戀しからむおりおり、とり出でて見  
給へ。（略）脱ぎおく衣を形見と見給へ。（竹取）

6 出て去なば心輕しといひやせん世のありさまを人は知らねば  
とよみをきて、出でて去にけり。この女かく書きをきたるを、  
異しう、こころをくべきこともおぼえぬを（伊勢二十一段）  
7 亡せたまひなむ後の事ども書きおきたまへる御処分の文どもに  
も（源氏・竹河）

8 忍びて通ひ侍ける人「今歸りて」など頼めをきて公の使に伊勢  
の国にまかりて歸まうで来て、久しうとはず侍ければ

(後撰九四四)

9 まめやかなる御とぶらひを聞こえおきたまひて歸りたまひぬ。

(源氏・若紫)

10 人の思すらんこともはしたなくなりて、いみじう恨み契りおきて

て出でたまひぬ。(源氏・東屋)

11 燕のまりおける糞を握り給へるなりけり。(竹取)

12 御衣をすべしおきて、ゐざり退きたまふに(源氏・賢木)

5 は月へ帰るかぐや姫が翁と嫗に文と衣を形見として残す場面、6

は女が歌を残して男のもとを去る場面、7 は八の宮が残した遺言書の説明である。9 から12 は一時的な退出、退去である。

・人を残す

13 蘆松木笑 荒山中尔 送置而 還良布見者 情苦喪

(万葉卷九・一八〇六)

あしひきの あらやまなかにおくりにおきて かへらふみれば

こころぐるしも

14 右近は、亡くなりける御乳母の捨ておきてはべりければ

(源氏・夕顔)

15 年ごろ馴れむつびきこえたまひつるを、見たてまつりおく悲し

びをなむ、かへすがへすのたまひける。(源氏・桐壺)

16 頼もしき御蔭に、幼き者を奉りおきて、みづからはなかなか幼

くより見たまへもつかず(源氏・少女)

17 かく放ちおきたるに心やすくて、人も言ひ犯したまふなりけむかし。(源氏・蜻蛉)

13 は亡骸を山に葬って人々が戻ってきたこと、15 は源氏の祖母が幼い源氏を残して亡くなるという意味である。16 内大臣が娘を母(娘の祖母)に預けっぱなしにしたことへの後悔、17 は薫が浮舟を放置したことへの後悔である。16 と17 は放置の意味が強いが、主体はその場から離れ、対象はその場にとどまるという点で、他と基本的意味は変わらない。

以上のように、本動詞の意味を残した用法では、実際に人や物がある場所・身分に配置・処遇する、自分が去った後に言葉、人、物を残すという意味で使われており、放置するという意味のものもあった。その場を去る状況は様々で、退出、外出と言った一時的なものもあるが、『源氏物語』では、死、出家のように後戻りのできない場合がほとんどである。自分が去った後のことを考慮に入れての意図的な行為(遺言、形見を遺す等)も、図らずもそのような結果になったという意図性のないものもある。物を置く、人を住まわせる・雇うなどの意味の場合は、「予め、前もって」というような準備的な意味は強くない。

#### 四 補助動詞的用法の後項動詞「おく」

##### 四・一 「おく」の形式化と前項動詞

まず、前述の本動詞の意味を保持している「おく」と補助動詞的用法の「おく」の違いから、「おく」の形式化を確認する。

18 君も乳母も、めでたしと見おききこえてし人の御ありさまなれば (源氏・東屋)

19 阿闍梨、年ごろ契りおきたまひけるままに、後の御琴もよろづに仕うまつる。(源氏・椎本)

20 足日本能 山櫻戸乎 開置而 吾待君乎 誰留流

(万葉卷十一・二六一七)

あしひきの やまさくらどを あけおきて あがまつきみを  
たれかとどむる

前にあげた15の「見たてまつりおく」では「源氏の祖母が源氏をおく」後に残して死ぬ」が成立するが、18の「見おく」は「浮舟と乳母が薫を素晴らしい方だと思っていた」という意味で、「浮舟と乳母が薫をおく」処遇する、残して死ぬ」が成立しない。また、19でも阿闍梨はその場にとどまっただけで、「阿闍梨がおく」は成立せず、このような「おく」は補助動詞的用法と考えられる。上代では「おく」の目的語がないと考えられるのは18の1例のみである。「戸を

置く」は成立しないと考え、とりあえず補助動詞的用法とする。

補助動詞的に使われた「おく」の前項動詞には次のような動詞がある。

万葉 開く(下二段)

土左 求む

古今 知る

後撰 頼む 契る

拾遺 祈る 思ふ

源氏 祈る 疑ふ 行ふ 思ふ(思す・思ひ給ふ) 聞くす

静む 占む 知る 染む 尋ぬ 契る 仕う奉る なる

匂はす のどむ 褒む 見ゆ 見る 結ぶ 許す

##### 四・二 「思ひおく」と「聞きおく」について

『源氏物語』では「思ふ」「疑ふ」といった情態動詞を前項としている点にまず注目したい。感情や感想は本来意図的なものではなく、自然発生的なものである。前述のように、現代語の「情態動詞＋ておく」は何らかの目的のために本来持っていない感情・思考をあえて持とうとする意味になるが、『源氏物語』の「思ひおく」にはそのような意味合いはないようである。また、「聞く」自体は意志を伴う動詞ではあるが、『源氏物語』の「聞きおく」からは明確な意図は感じられない。そこで、現代語の「ておく」に置き換え

ると違和感のある「思ひおく」「聞きおく」から「くおく」の意味を考察してみた。

#### 四・二・一 「思ひおく」

「思ひおく」は辞書には「心に決める。死後に思いを残す。」とあるが『源氏』の例から考えられる意味は、やや異なる。

21院にも（略）ゆゆしきまで見えたまひし御容貌を、忘れがたう  
思ひおきければ（源氏・滯標）

22故姫君をひき避きてこの大将の君に聞こえたまひし御心を、  
後は思ひおきて、よろしうも思ひきこえたまはず。

23いかで人にもことわらせたてまつらむ、と思ひおきし忘れがた  
くて（源氏・螢）

24思ひおきつる方の異なるにやと、疑はしきことさへなむ。  
（源氏・総角）

25また、さやうにを人知れず思ひおきたまへ。（源氏・蜻蛉）

21は朱雀院が斎宮の美しさをずっと忘れがたく思っていたこと、22は左大臣が娘婿として東宮ではなく源氏を選んだことを根に持っていること、24は大君が心に決めた人は他にいるという意味である。これらのように、源氏の「思ひおく」すべてに共通する意味は「心情・意志の持続」であり、「意志の持続」の場合は、辞書にあるよ

うに「心に決める」という意味になるが、「決める」ことではなく、決意の持続に重点がある。過去から現在にいたる心情・意志の持続の例が多いが、25のように今後の持続を示すものもある。

26あぢきなき心にまかせて、さるまじき名をも流し、うきものに思ひおかればべりにしをなん、世にいとほしく思ひたまふ  
る。（源氏・滯標）

27これのみぞ、うしろめたくむすばはれたることに思ひおかるべき心地したまひける。（源氏・薄雲）

26は「私」源氏が浮名を流したせいで、六条御息所に嫌な男だとずっと思われていた。そして、そう思ったまま御息所は亡くなった」、27は「皇子が不義の子であることを帝は知らないことだけが藤壺にとつて気がかりなこととしてずっと」死ぬまで、あるいは死後も気にかかる」という意味である。これらは「死後に思いを残す」とも取れるが、「死ぬまで思う、死後も思い続ける」という点で、「心情・意志の持続」という基本的な意味は変わらない。これは「おく」の「持続」と「去り際」の二つの意味を重ねて用いられたものと思われる。また、27では自発の助動詞に接続していることにも注目したい。

『源氏』以外の資料の「思ひおく」には次のようなものがある。前述の通り、和歌では露の縁語、「露が置く」との掛詞で使われる場合が多いが、基本的に「心情・意志の持続」という意味で、大きな違いは見られない。



28 露の命何時とも知らぬ世中になかつらしと思をかるる

(後撰一〇〇八)

29 かくてほどもなく、不浄のことあるを、出でむと思ひおきしか

ど(略)さし離れたる屋に下りぬ。(蜻蛉日記)

#### 四・二・二 「聞きおく」

『源氏物語』の「聞きおく」はすべて、「以前その情報を耳にしたことがある、以前得た情報が記憶に残っている」という意味である。

30 思ひ上がれる気色に、聞きおきたまへるむすめなれば、ゆかし

くて(源氏・筥木)

31 帝のかしづきたてまつりたまふさまなど、聞きおきたてまつり

て(源氏・若菜下)

32 かのあさましかりし古事を聞きおきたまへるなめりと恥づかし

く(源氏・初音)

30は空蟬の気位の高さを源氏が噂に聞いていた、31は女三宮を帝がかわいがっていることを源氏が耳にしていた、32は空蟬の昔の噂が源氏の耳にもはいっているだろうということで、それぞれ、求めて得た情報というより、おのずと耳に入ってきた情報が現在まで記憶に残っていたことを表している。訳や解説には「聞いたことを記憶にとどめておいた」というような記述が見られるが、「記憶にとど

める」ことについての意図性もあまり感じられない。『枕草子』の次の例でも『源氏』と同様のことが言える。

33 まだまゐらざりしより、聞きおきたまひける事など、「まこと

にさやありし」などのたまふに(枕草子一八四段)

「思ひおく」の場合、「その心情、意志を持っている」状態が持続しているが、「聞きおく」の場合、「聞く」という動作はすでに完了しており、前項の影響・効力が持続していることを表している。つまり、現代語の文法カテゴリーで言えば「パーフェクト」に近いと思われる。

#### 四・三 意図性のない「ゝおく」

以上のように、「思ひおく」「聞きおく」の用例から「ゝおく」に意図性が伴わないことを考察した。次に、「思ふ」「聞く」以外の前項動詞に下接する「ゝおく」の中から、意図性がない、あるいは薄いと思われるものについて、『源氏』以外の用例も加えて考えてみる。

34 あだあだしく心弱くなりおきにけるわが怠りに、かかる事も出で来るぞかし。(源氏・若菜上)

35 身のほどなるものはかなきさまを、見えおきたてまつりたるばかりこそあらめ。(源氏・若菜上)

36 やみおきてけふかあすかとまつほどの折節しるは涙なりけり



(貫之集)

前項の「なる」「見ゆ」「病む」は意志を伴わない動詞である。「心弱くなる」は自らの意志で左右できない変化であり、「見ゆ」はもとも「見える、見られる」という自然発生的、あるいは受身的な意味である。「なりおく」については、別の資料に「生りおく」と解釈されている例<sup>(7)</sup>があり、『源氏』の例も同様に「あだあだしく心弱く生れついた」ともとれるかもしれないが、「成りおく」にしても「生りおく」にしても、意志性、意図性は認められない。つまり、これらも前項動詞の影響・効力の持続と解することができる。

37東の五条わたりに人をしりをきてまかり通ひけり。

(古今・六三二詞書)

38少納言をはかばかしきものに見おきたまへれば、親しき家司ども具して、知ろしめすべきさまどものたまひ預く。

(源氏・須磨)

37の「しりおく」も目的を持って知ろうとしたとは考えにくく、かねて知っていたとの意味である。38の「見おく」は源氏が少納言を前から評価していたということで、どちらも「おく」は持続を表している。

四・四 意図性のある「しおく」

39いもじ、あらめもはがためもなし。かうやうのものなきくにな

り。もとめしもおかず。(土左)

40私の懸想もいとよくしおきて、案内も残ることなく見たまへおきながら(源氏・夕顔)

41ただ幼きどちの結びおきけん心も解けず(源氏・常夏)

42言葉の限りまばゆくほめおきたるに、し出でたるわざ、言ひ出でたることの中に、げにと見え聞こゆることなき、いと見劣りするわざなり。(源氏・堂)

43やうやうさるかたにかの心をものどめおき、わがためにも、人のもどきあるまじく(源氏・浮舟)

44まだしき願などはべりけるを、御心にも知らせたてまつるべきをりあらば、御覧じおくべくとやとてはべるを

(源氏・若菜上)

40は源氏の従者惟光が源氏の目当ての女性の周辺と以前から懇意にしている邸内も見知った状態であるという意味、41は夕霧と雲居雁が将来を約束していたこと、42は女房達が姫君を前からほめていたが本人の言動がそれにすぐわなないという意味である。43は薫が浮舟の心を落ち着かせること、44は明石入道の遺したものを源氏も見た方がよいという明石の君の判断である。それぞれ、惟光が主人・源氏を夕顔の所へ手引きをするための準備、は宇治の邸に浮舟を住まわせるための準備と考えることもできる。44は将来のことを考えての判断と言える。また、前にあげた20の『万葉集』の例は目的を持って戸をあけておいたと解釈してよいだろう。これらは、前項動詞の

影響・効力の持続という点でこれまで見てきた他の「ゝておく」と基本的意味は同じであるが、そこに「何らかの目的を持って、将来を考えて」という意図性が加わっている可能性がある。その意図性の有無、あるいは強弱は、それぞれその主体の人物像や物語の展開の解釈によって変わるのではないだろうか。

## 五 まとめ

後項動詞「おく」は本動詞の意味を保持しているものと補助動詞的な用法のものとに大別される。本動詞の意味を残す後項動詞「おく」は、「後に残す」「配置、設置、処遇」の二つに分けられ、「後に残す」の中には「放置」の意味の強いものもある。形式化して補助動詞的に用いられている後項動詞「おく」の基本的な意味は、パーフェクト的な「前項動詞の結果、影響、効力の持続」であり、現代語の「ゝておく」に見られるような意図性は「ゝおく」成立の必須条件ではない。「持続」の用法をさらに細かく考えると次のようになる。

- ① 前から・前にゝていた、これからずっとゝてゆく
- ② 先のことを考えて（予め）ゝする。

これら補助動詞の用法の「持続」の意味に、本動詞の用法を残した「後に残す」自分が去る（死・出家）に当たり、言葉や物を残す」という意味が加わり、「後のことを考慮に入れて動作をし、その効

力を持続させる」という意味に傾いていった可能性が考えられる。

### 注

- (1) 形式化（接頭辞的用法、補助動詞的用）の基準については、山本（一九八四）を参考に、「文の主語との間に格関係が成立しない自動詞、前項あるいは後項動詞の目的語との間に格関係が成立せず、独自の目的語も持たない他動詞は形式化している」とした。

- (2) 高橋太郎「すがたともくろみ」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』（むぎ書房、一九七六年）
- (3) 吉川武時「現代日本語動詞のアスペクトの研究」金田一春彦編『日本語動詞のアスペクト』（むぎ書房、一九七六年）
- (4) 菊地康人「ゝておく」の分析『東京大学留学生センター教育研究論集』第十五号（東京大学、二〇〇九年）
- (5) 前頁の「じぶんでころんでおいて」のように、本来は意志を伴わない動作に「おく」をつけて意図性を示すことにより、責任の所在を強調する場合もある。
- (6) 高橋太郎『動詞九章』に現代語の「ゝておく」とパーフェクトについて言及がある。
- (7) 『夜の寝覚』（オンラインデータベース新編日本古典文学全集）「人がらの、限りなくのみなりおきにければ」の頭注に「なりおき」はやや熟さぬ言葉であるが、一応「生りおく」で、形成している、生れついているなどの意に解しておく」とある。

### 《テキスト》

『万葉集』（塙書房、一九八一年）

古典文学大系『古代歌謡集』（岩波書店、一九五七年）  
 新古典文学大系『続日本紀』（岩波書店、一九八九年）  
 古典文学大系『竹取物語』（岩波書店、一九五七年）  
 古典文学大系『土左日記』（岩波書店、一九五七年）  
 古典文学大系『伊勢物語』（岩波書店、一九五七年）  
 新古典文学大系『古今和歌集』（岩波書店、一九八九年）  
 新古典文学大系『後撰和歌集』（岩波書店、一九九〇年）  
 新古典文学大系『拾遺和歌集』（岩波書店、一九九〇年）  
 古典文学全集『源氏物語』（小学館、一九七〇年）一九七五年）  
 オンラインデータベース新編日本古典文学全集  
 『貫之集』『蜻蛉日記』『枕草子』『夜の寝覚』

#### 《参考文献》

伊藤博他『万葉集全注』（有斐閣、一九八三年）  
 北山谿太『源氏物語の語法』（復刻版）（平凡社、一九九七年）  
 工藤真由美『アスペクト・テンズ体系とテキスト―現代日本語の時間表現』（ひつじ書房、一九九五年）  
 工藤真由美『現代語のテンズ・アスペクト』『朝倉日本語講座6』（朝倉書店、二〇〇三年）  
 鈴木泰『古代日本語動詞のテンズ・アスペクト―源氏物語の分析』（ひつじ書房、二〇〇〇年）  
 関一男『国語複合動詞の研究』（笠間書院、一九七七年）  
 東辻保和他『平安時代複合動詞索引』（清文堂、二〇〇三年）  
 姫野昌子『複合動詞の構造と意味用法』（ひつじ書房、一九九九年）  
 廣瀬裕子『動詞「おく」の文法化のメカニズム・本動詞「おく」と補助動詞「くておく」の意味的関連性』『日本認知言語学会論文集』

6（日本認知言語学会、二〇〇六年）  
 山部順二「補助動詞「おく」の意味」『ノートルダム清心女子大学紀要日本語・日本文学編』25(1)（ノートルダム清心女子大学、二〇〇一年）  
 山部順治「補助動詞「おく」の諸用法の共時的つながりと通時的拡張経路」『ノートルダム清心女子大学紀要 日本語・日本文学編』29(1)（ノートルダム清心女子大学、二〇〇五年）  
 山本清隆「複合動詞の格支配」『都大論究』21（東京都立大学、一九八四年）

（とくもと あや 大学院後期課程在学生）